



2010年7月26日(月) 開催

テーマ:「東アジアの安全保障環境の趨勢」

報告者: 大澤 淳(主任研究員)

概要

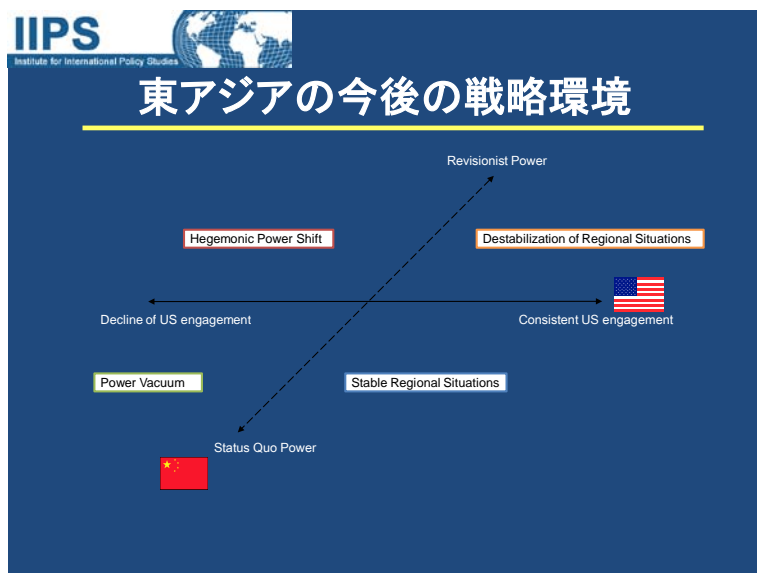
- 1 今後10年～20年先を見越した東アジアの安全保障環境を考えるにあたっては、国際関係論の理論的な枠組みをベースに、東アジア地域の戦略環境が今後どのような趨勢をたどるのかを検討することが有用である。
- 2 経済史学者のアンガス・マディソンによれば、2030年には中国とインドが世界経済の3～4割を占めるようになり、21世紀は、中国とインドが世界経済の中心であった18世紀以前の時代に戻りつつある。そのような大国間のパワーの変動が起こりつつある21世紀のアジアでは、大きな戦略環境の変化が今後予想される。
- 3 長期的な戦略環境の趨勢を考えるベースの一つが、19世紀以降欧米で確立されてきた「地政学」である。地政学の生みの親とされる英国の地理学者ハルフォード・マッキンダー(1861-1947)は、ハートランド論を初めて提唱し、長年にわたる大陸と海洋を巡る戦いの歴史を、ランド・パワーとシー・パワーの抗争として整理している。マッキンダーは、現在のロシアにあたる部分をユーラシア大陸のハートランドと定義し、この地域を圧倒的なランド・パワーが制すれば、世界を制すことになると考えた。ハートランドに於いて圧倒的なランド・パワーが成立するのを全力を挙げて阻止するのが、シー・パワーである英国の宿命であり、両者の均衡こそ自由の基礎であるとマッキンダーは主張した。
- 4 20世紀の冷戦期における、アメリカの戦略概念に決定的な影響を及ぼしたのは、アメリカの地政学者でイェール大学教授でもあったニコラス・スパイクマン(1893-1943)である。スパイクマンは、マッキンダーのハートランド論を発展させ、ハートランドの周辺地域(極東、中国、東南アジア、インド、中東、地中海、中東欧、北欧)をリムランドと名付け、リムランドを支配する物がユーラシアを制し、ユーラシアを支配する物が世界の運命を制すると考えた。ユーラシアにおいて、強力な勢力がリムランドを制することになれば、アメリカは地政学的に包囲されるとして、ユーラシアにおける大国がリムランドを制し、アメリカにと敵対的な同盟がユーラシアで成立するのを防ぐことが、アメリカの戦略であると主張した。
- 5 マッキンダーやスパイクマンに代表される地政学的な戦略観は、英米においては依然として影響力を持っており、21世紀の東アジアをどのような視点で超大国アメリカが考え

ているのかを理解する上で非常に示唆に富んでいる。

6 長期的な戦略環境の変化を考える上で、もう一つ参考となる考え方が、国際関係論における「大国の興亡」ないし「覇権交代」の考え方である。ポール・ケネディは、『大国の興亡』の中で、平時における大国の経済成長の速度の差が、相対的な関係の中でそれぞれの国の興亡を決定する、と主張している。また、国際政治学者ロバート・ギルピンは、国家のパワーとその分布の形態が国際システムの動きと安定を形作ると考え、覇権国が強力であるときには国際システムは安定するが、覇権国が弱体化してくると国際システムは不安定になる、と主張している。大国間の力の変遷による覇権国の交代が過去500年間にほぼ70~100年サイクルで発生してきた、という考え方が国際関係論の有力な考え方の一つである。

7 そのような視点で、現在の東アジアの戦略環境を眺めるならば、米国の国際政治学者ジョン・アイケンベリーが主張しているように、21世紀は覇権国米国と挑戦国中国によって力の推移が争われる時代であり、地政学的には、東アジアのリムランドにおいて超越的な大国が成立するのを防ぐことが、シー・パワーである米国の戦略になりうると理論的に想定される。

8 上記のような視点から、東アジアの戦略環境の趨勢を決定づけるドライビングフォースを規定するとすれば、①シー・パワーである米国が東アジアのリムランドへの関与を継続するか否か、②ランド・パワーである中国が現状維持国家(Status Quo Power)のままであり続けるのか、それとも覇



権国米国に挑戦する修正主義の大国(Revisionist Power)になるのか、という2軸になる。この2軸によって想定される東アジアの戦略環境の趨勢は、①地域情勢の不安定化、②覇権国の交代、③地域情勢の安定、④力の空白、の4つの象限のいずれかになると想定される。現状は③の状態にあるが、今後二つの大国の行方によっては、①や②の戦略環境が出現する可能性もある。

- 9 実際に最近の安全保障の変化に見る東アジアの戦略均衡の行方を検討すると、上記のような戦略環境の趨勢が、大きな影響を与えつつあると思われる。

- 10 2009年度版の米国国防総省の「中国の軍事力に関する報告書」によれば、「中国が、グローバルな影響力の拡大を持って、地域の政治的経済敵対国として台頭していることは、今日の世界及び東アジアの戦略的環境の重要な要素である」との認識が示されており、さらに、「接近阻止／領域拒否、核、宇宙、サイバー戦などの分野で能力を高めつつあり、その意味合いはアジア太平洋を越える意味合いを持ちつつある」との分析がなされている。同報告書は、「中国の透明性の欠如は、誤解や判断ミスの原因となりかねず、安定性を損なうリスクを生み出しつつある」として、アジア太平洋地域の地域情勢の不安定化に懸念を表明している。

以上